The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	英語におけるHの歴史
Author(s)	神山, 孝夫
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2018, 52, p. 41-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76090
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

英語におけるHの歴史

神 山　孝 夫

キーワード：英語のH音／印欧祖語／ゲルマン祖語／古英語／中英語

0．緒言

はじめにこのささやかな一文を草するに至った経緯を略述しておきたい．

本誌への寄稿を求められた際には，若きソシュール（Ferdinand de Saussure, 1857-1913）の『覚え書』（=Saussure 1879）を高評したBrugman（1879）[1]を解題してお茶を濁そうかと考えた．Bgmの匿名で密かに物したこの短評はあまり知られておらず，これを解説すればソシューリアンならずとも一部の言語学徒に興味深かろうと愚考したからである．Cf. 神山（2017: 43-47, 109-113）．

しかし，以下のような事情から，その計画はしばし延期することにした．翻意のきっかけとなったのは，過日実施した「英語R音をめぐる諸問題」なる拙い話であった．[2] 印欧語古来のR音が歯茎ふるえ音［r］であることは疑いない．これを用いる話者も散見されるものの，絶対的多数の英語話者はこれに代わって通言語的に奇異な歯茎接近音［ɹ］ないしそり舌の［ɻ］を用いている．このR音の置換は不思議なことであり，この変化の発生原因は未だ明らかでない．そのため，多少とも今後の研究を触発することを願い，この発音習慣の変化が生じた経緯について年来温めた愚見を披露した次第である．

その着眼点としたのは，「子音＋［r］」の間に加わり得る挿入音（epenthesis）の［t］や［d］，OE〈r〉の前で起こる前舌母音の二重母音化ないし「割れ」（breaking），ラテン語やゲルマン語において〈s〉が〈r〉に転じる現象（rhotacism）とフランス語史等にも見られるその類似現象，そしてOE以来，異常とも言える高い頻度で発生する母音と〈r〉のメタテーゼ（metathesis）であった．適宜，注2に記した資料と神山（2014; 2016）を参照されたい．

さて，そのお話の後の質疑応答において，Bēowulf に登場するデネの王 Hrōþgār における語頭の〈h〉の発音について質問を受けた．当日の主題との関係は濃くないものの，英語において鳴子音（resonant）に先行する〈h〉がもともとどのように発音されたのか，そしてそれがどのように移り変わったのかもまた英語の通時音韻論における焦眉の問題であり，神山（2015: 156, 163）等にも不十分ながら触れたことがある．ご質問にはその場で一通りのお答えはしたが，細部においてはこちらも心許なく，これを機会に再検討する必要性に気づかされた．敢えて予定を変更し，この問題を含めた英語〈h〉の表す音の変遷全般について一文を草することにした次第である．

1．古英語における文字と音の対応

紀元前 15 ～ 14 世紀のギリシア語ないしミュケーナイ語を記した線文字 B や一時期ノルド語を記した新フサルクなどのように不完全な表記が比較的短い間用いられた例もあるが，概して一定期間安定して記された古い言語では綴りと発音とが密な対応関係にある．しかし，それは必ずしも 1 文字が 1 音に厳密に対応することを意味しない．過不足ない文字組織が採用されている場合，当該言語の話者が同じ音の範疇ととらえる音の集合，すなわち音素の様々な異音が 1 つの文字で表わされるのは通常のことである．OE もその例に漏れず，1 文字が複数の音に対応している場合がかなりある．例えば〈f, s, c, g〉はそれぞれ［f, v］，［s, z］，［k, c（> tʃ）］，［ɣ, g, j］を表記した．小文が対象とする〈h〉も場合によって［h, x, ç］と実現したことは恐らく間違いない．これらの異音が後に別々の音素の地位を獲得してゆくことは英語の歴史を見れば一目瞭然であるが，OE 詩においてこれらの異音が頭韻を形成していたことからして，OE 期におけるそれらの音韻論的同一性は確実である．

以下では必要に応じて正書法上の，ないし標準と考えられる表記を〈 〉で，IPA による音声表記を［ ］で，音素表記を/ /で示す．また，煩瑣を避けて R 音の音声表記はすべて［r］とする．

2．古英語〈h〉の由来

2.1　OE〈h〉< PIE *k

ModE heartの祖先たるOE heorteにはGoth. haírtō［hɛrto:］等と同様にゲルマン祖語の語根*hert-が含まれると考えられる．この語根に，グリム（Jacob Grimm, 1785-1863）が「弱変化」と名付けた曲用に特徴的な接尾辞Gmc. *-en-, *-an-, *-un-（<PIE *-en-, *-on-, *-n̥- /-n̩-/）[3]と語尾が加えられることによってこの語の様々な形態が得られる．o階梯の接尾辞PIE *-on->Gmc. *-an-とゼロ語尾を加えた中性名詞単数主格形はGmc. *hert-anと予想され，末尾の鼻音の脱落と先行母音の代償延長（Gmc. *-an>*-ā>*-ō）により*hertō，そして上記のゴート語形や，母音の弱化と語根母音の割れによってOE形に至る.[4]

ゲルマン語内での情報から予想されるGmc. *hert-は以下のような印欧諸語派に見られる同義の形態と親近と見られる.

2.1.1　PIE *k[5]

（1）に記す諸言語は“heart”を意味し，かつ語頭に*kを持つ正常階梯の語根*kerd-ないし母音部が縮減して隣接する流音が音節核となったゼロ階梯*kr̥d- /kr̩d-/の発達形を示す．右欄における成節流音*r̥ /r̩/にはほとんどの語派で独自に挿入母音（anaptyxis）が加えられてその成節性が排除されている．その表れは神山（2017: 22ff.）に整理したので適宜参照されたい.

（1）

PIE	*kerd-	*kr̥d-
Hitt.	kēr[6] <*kerd-	gen. kardias<*kr̥d-jos
Gk.	κῆρ /kɛ̂:r/<*kerd-	καρδία /kardjă:/ ～ κραδίη /kradjĕ:/<*kr̥d-jā
Lat.		cor<*kr̥d
OIr.		cride /kʲrʲiðʲe/<*kr̥d-jom

2.1.2　歯擦音化を示す諸言語

他方，（2）の諸言語は，同じく“heart”を意味する語の語頭に，［k］に代わって歯擦音を示す.

(2)

Skr.	(śrad- /ʃrad-/ “trust”<*kred-[7])	[8]
OCS	srěda /sræda/ <*kerd-ā “center”	srьdьce /sr̥ḍḍ̥tsʲe/[9] <*sirdikom<*kr̥d-ikʷom
Lith.		širdìs /ʃʲir'dis/<*kr̥d-i-s
Arm.	sirt<*kerd-is	

隣接する前舌母音に同化して［k］が調音位置を前進させて［c］に変化することは容易に予想されるが，硬口蓋閉鎖音を安定して保持する言語は少ない．これは声道の形状に原因がある．成人の硬口蓋は上方にくぼみ，そこに舌背を密着させることは容易でない．そのため，理論的に予想される硬口蓋閉鎖音の代わりに，調音が容易で調音位置が接近した歯擦音が現れることが多い．

このような子音の変化はpalatalizationと呼ばれる．E. palate（Lat. palātum）は解剖学で口腔上部の口蓋全体を表すから，その派生語palatalizationは日本語で大概「口蓋（音）化」と呼ばれる．だが，軟口蓋音の「口蓋（音）化」はいわばスパゲティーの「パスタ化」のようで意味をなさない．すなわち「口蓋（音）化」という用語は不適当なのである．

英語の場合，hard palateやsoft palateのように古来のゲルマン語の語とラテン語からの外来語との組み合わせから形容詞やほかの品詞を派生させることは難しい．そこで口蓋帆velum（Lat. vēlum palātīnum）の形容詞であるvelar（Lat. vēlāris）を，その口腔側のみを指すsoft palateの形容詞に代用し，さらに，本来は硬口蓋と軟口蓋の両者を表すpalateの形容詞palatalをhard palateに対応する用語として「便宜上」用いているに過ぎない.[10]だが，「palate＝口蓋」という愚直な理解によって日本語の用語に上記のような混乱が生まれているのは困ったことである．

音声学においてpalatalは口蓋全体ではなく，硬口蓋について用いられ，その派生語palatalizationは，歴史言語学では軟口蓋音が調音位置を前進させて硬口蓋音（さらに歯擦音）に転じる現象を，また音声学では前舌面を硬口蓋に接近させて口腔内の共鳴室を狭め，発される音の高音域を増幅する第2次調音を指す．いずれの場合においても日本語では「硬口蓋化」と称するのがふさわしい．また，誤解を招くpalatal(ization)とvelar(ization)を廃し，例えばそ

れぞれ duropalatal(ization) と mollipalatal(ization) 等に改めることも一案かもしれない．上にも触れたように英語 hard palate, soft palate からは直接の派生語が作れないが，ラテン名 palātum dūrum と palātum molle からならそんな造語も恐らく可能だからである．

例えば ModE choose の祖先たる OE ċēosan［'tʃeːǫzɑn］（<Gmc. *keus-an-<PIE *geus-）の語頭は硬口蓋化［k］>［c］>［tʃ］を経たことが明らかであり，もともとの語頭子音［k］は前舌母音を縮減させた（すなわちゼロ階梯の）過去分詞 coren［'koren］（<Gmc. *kus-<PIE *gus-）に残っている．同様の硬口蓋化の結果はイタリア語やスラブ語，またサンスクリット等にも見える．

フランス語もかつて同様の変化を経験したが，事情はやや複雑である．Lat. centum［'kentum］“100”を受け継いだ OF cent は硬口蓋化を経て当初［tsent］と発音され，後に破擦音［ts］が摩擦音［s］へと変化した．後者の段階から英語に借入されたのが今日まで米等の通貨単位に残る ME cent である．

この変化が終わった後に，OF /a/ は［æ］にやや前舌化した形跡があり，その作用により先行する軟口蓋音がまた硬口蓋化を生じた．Lat. camera は規則的な語末母音の弱化と次末音節母音の脱落，次いで新たに生まれた子音連続 -mr- への挿入音 -b- の添加を経て OF chambre へと至る.[11] 〈ch〉で表示された今度の硬口蓋化の結果は［tʃ］であり，後に［ʃ］に摩擦音化した．これを借用した ModE chamber は古い破擦音［tʃ］の段階を保っている．

これらの言語の歴史に見られるような硬口蓋化，歯擦音化，さらに摩擦音化という一連の変化はおおむね（3）のようにまとめられる．

（3）

$$[\,k\,] \;>\; [\,c\,] \;>\; \left\{\begin{array}{l}[\,tʃ\,] \\ [\,ts\,]\end{array}\right. \;>\; \begin{array}{l}[\,ʃ\,] \\ [\,s\,]\end{array}$$

同じ一連の変化は，隣接音にかかわりなく，（2）に収めた印欧諸語派にも生じたと考えることができる．これらに生じる歯擦音が祖語の軟口蓋閉鎖音に由来することは，Benfey（1837: 907）が看破して以来徐々に諸家の受け入れるところとなり，後に Bradke（1890: 63ff.）による命名が定着した．軟口蓋閉

鎖音を保持する印欧諸語と，それを歯擦音に転じたそれらは，それぞれcentum語群，satəm語群と呼ばれている．テストワードとして用いられたのは(4)に記す100を表す語であり，ラテン語とアヴェスタ語の形態が各グループの代表とされた．前者には後に解読されるヒッタイト語を含めておく．

(4)		[k]		[s, ʃ]
	Hitt.	(ME)[12]	Skr.	śatám /ʃa'tam/
	Gk.	ἑκατόν /hekatŏn/	Av.	**satəm**
	Lat.	**centum** /'kentum/	OCS	(sъto /sə̯to/)[13]
	OIr.	cét /k^{j}e:d/	Lith.	šimtas /ʃ^{j}ĩmtas/
			Arm	(hariwr /harjur/)[14]

2.1.3 Gmc. *h [x] < PIE *k

ゲルマン語以外のデータから導かれる印欧祖語の語根 *kerd- は既述のようにGmc. *hert-(e.g. Goth. haírtō [hɛrto:])に対応すると考えられる．ここに見られるPIE *kとGmc. *h，またPIE *dとGmc. *tの対応のような子音の「ずれ」ないし子音推移はRask(1818: 169ff.)によって指摘され，Grimm(1822: 583ff.)による総括によって広く知られることとなった．舌尖音ないし歯茎音を例として(5)にその骨子を示す：

(5)		PIE	Gmc.	
	a.	t	θ	無声**閉鎖音** → 無声**摩擦音**
	b.	d	t	**有声**閉鎖音 → **無声**閉鎖音
	c.	d^{h}	ð	有声**帯気閉鎖音** → 有声**摩擦音**

この，第1次子音推移ないしグリムの法則にまとめられた諸推移がいかにして発生したかを解明することは難しい課題である．とはいえ，上表を一瞥するだけでも(5a)の過程が(5b)に先んじて生じたことは明らかである．すなわち，仮に(5b)が(5a)に先んじていたならば，ゲルマン語は無声閉鎖音をまったく欠いているはずだが，現実のゲルマン語にはそんな音がふんだんに見いだされるからである．また，(5a)が[t^{h}]のような帯気音を経ているとすれば，(5b)とともにVOT (voice onset time)が増した末の変化とみなしうることになるが，(5c)にその解釈を適用することは困難であり，(5a)，(5b)と

(5c)の間には大きな断絶が感じられる．すなわち，グリムの法則を構成するこれらの個々の過程は別個に生じたと見られる．また，極端な解釈としてはゲルマン語(と，類似の子音推移を示すアルメニア語)にこそ祖語に近い子音の状態が保たれていて，他の語派すべてに逆の子音推移が起こったとする説までが提案されており，関係する諸事情すべてが明らかになっているとは言えない．勝手ながら，これらについては今のところ清水(2012: 54ff.)に譲り，本稿では伝統的かつ穏便な解釈，すなわち印欧祖語の音がゲルマン語(ならびにアルメニア語)において一定の変化を被ったとの立場を採る．

さて，グリムの法則がどのような過程の集合であるにせよ，またPIE *k, Gmc. *hのいずれが古いにせよ，これらの音の組織的な対応関係に疑うべきところはない．グリムの法則は調音様式の変化であって，該当する子音の調音位置は変化しないとすれば，Gmc. *hの本来的な音価は軟口蓋摩擦音[x]とみなされることになる．Gmc. *hはまた諸家の主義によって*xとも，あるいはさらに*χとも表記されるが，英独をはじめとする現代ゲルマン諸語の書記法との一致を重んじれば*hが，その音声実現を重んじれば*xを用いた表記が好ましい．無論，それを引き継いだOE〈h〉の本来的な音価が軟口蓋摩擦音[x]であることは疑いない．

2.2 OE〈h〉≪ Gmc. *[ɣ] < PIE *gh, *k

OE〈h〉の本来の音価が[x]であることを別の点から裏付けるのが，OEにまま見られる〈g〉と〈h〉との交替である．

OE〈g〉もなかなか把握が厄介な子音字である．その主な起源はPIE *gh > Gmc. *g[ɣ]であるが，PIE *k > Germ. *h[x]の一部がヴェルナーの法則[15)]によって同じく[ɣ]に至り〈g〉と綴られる．

だが，OE〈g〉の発音は音声環境によってさまざまであった．まず，鼻音に後続する場合には早期のうちに閉鎖音[g]に転じた．これは摩擦音の前で失われるはずの鼻音が保たれていることからわかる．OE hōn “to hang”(<[ho:n]<*[ha:han]<*[xã:xan-]<*[xánxan-])が摩擦音の前の鼻音，次いで

後述のような経緯から［x］（>［h］）を失い，*［aː］>［oː］を経て得られるのに対し，その過去分詞 ġehangen は*［xanxánaz］からヴェルナーの法則による有声化を受けた*［xanɣ-］>*［xaŋɡ-］から得られる．積極的証拠は見いだしにくいが，語頭の［ɣ］も OE 末期までには閉鎖音［g］に転じたらしい（e.g. Smirnickij 1955: 71, 77）．また，語中の［ɣ］は恐らく円唇化した［ɣʷ］を経て ME 以降［w］で現れる．Gmc. *fuglaz［ɸuɣlaz］に由来する OE fugol［fuɣol］（cf. G Vogel）が ME fowel を経て fowl に至っていることなどを参照されたい．

さらに，よく知られているように，i ウムラウトによらない真に前舌母音的な環境にあるとき，すなわち前後を i ウムラウト以前からの前舌母音に挟まれる，ないし，語頭ではそんな前舌母音が後続する場合，語末ではそんな前舌母音が先行する場合，〈g〉［ɣ］は硬口蓋化した［ɣʲ］を経て［j］に転じる．一例に，ModE may にあたる OE magan［mɑɣɑn］の現在 1 人称単数形 mæġ［mæj］を挙げておく．Gmc. *a は原則的に前舌母音の OE æ に対応するが，[16] この動詞の不定形では後続音節の［ɑ］によって，この推移が妨げられている．

さて，上記のようにヴェルナーの法則によって Gmc. *h から［ɣ］が得られるのだから，Gmc. *h の音価はその無声音［x］であったはずである．

さらに OE〈g〉［ɣ］が無声化を予想させる位置に置かれると〈h〉が綴られる．例えば OE beorgan［ˈbeo̯rɣɑn］“to protect”（<Gmc. *［βerɣ-］<PIE *bhergh-）の現在 3 人称単数形 *bhergh-et-i>Gmc. *［βerɣeθ］>Pre-OE *［ˈβeo̯rɣiθ］は i ウムラウトの作用により bierg（i）þ［ˈbie̞rɣ（i）θ］さらに bi（e）rhþ［ˈbi（e̞）rxθ］となり，無声音［θ］の前で［ɣ］が逆行同化によって［x］に無声化したことが確認される．

語末においても同様の現象が見られる．Gmc. *［ɣanoːɣ-］（ON gnógr, G genug）から得られる Pre-OE *［ɣænoːɣ-］>OE ġenōg［jeˈnoːɣ］“enough”はしばしば ġenō*h* と綴られ，語末〈g〉の無声化が確認される．

類例に OE āgan “to owe, own”（cf. Goth. aigan）の現在と過去の 1・3 人称単数形 ā*h*/ā*h*te, burg と bur*h* “fort, oppidum”（cf. Goth. baúrgs, G Burg）等々を挙げることができ，いずれの場合でも OE〈g〉と〈h〉が有声音と無声音のペアであって，後者の音声実現が［ɣ］の無声音［x］であることは明らかである．

2.3 OE 〈h〉≪ Gmc. *k < PIE *g

閉鎖音の結合において一方の閉鎖音が摩擦音に異化する現象はヘレニック，イタリック，バルト・スラブ，ケルトをはじめとする多くの印欧語派に見られる.[17] OEにおいてこの現象が明瞭に見られるのは，Gmc. *k（< PIE *g）に終わる語根に，dental suffixとも呼ばれ，弱変化動詞ないしいわゆる規則動詞の過去・過去分詞形を作る-d-[18]が後続する場合である.

例えばOE sēċan “to seek”（<*[ˈsœːcɑn] <Gmc. *sōk-jan-; cf. Goth. sōkjan）[19]の不規則的に見える過去分詞形sōht “sought”は，同じ語根にdental suffixを付加した*sōk-d->*[soːkt] > [soːxt]により極めて規則的に導かれる.

同様にしてþenċan “to think”（<Gmc. *þonk-jan-; cf. Goth. þagkjan [θaŋkjan], PIE *tong-）の過去分詞þōht “thought”もGmc. *þonk-d->*[θonkt-] >*[θonxt-]，さらに摩擦音の前での鼻音の削除と先行母音の鼻母音化ならびに代償延長を経た*[θõːxt]から得られる．wyrċan “to work”（<*wurk-jan-<PIE *wr̥g-）の過去分詞weorhtも同様だが，正常階梯PIE *werg-を基にしたGmc. *werk-d->*[werxt-]に前舌母音の割れが加わっている．さらにメタテーゼを経たのがModE wroughtであり，無論workedは完全な新形である.

いずれの場合でも〈h〉が[k]と同じ軟口蓋音であることは明らかである.

2.4 OE 〈hw〉< PIE *kʷ, *kw

OE〈h〉を生み出した音としてlabio-velarとも呼ばれるPIE *kʷ，ならびに音連続*kwも考慮しなければならない．これらはグリムの法則の結果，機械的にそれぞれGmc. *[xʷ]，*[xw]となると期待されるが，ゲルマン語において両者が区別された形跡はない．この音にはゴート語で1文字〈hw〉が対応するため，この音はその話者にとって不可分の音単位と感じられていたはずである．すなわち，その本来の音価は*[xʷ]であったと考えられよう．しかし，後の発達からすればこの音はその後徐々に[hʷ] = [w̥] = [ʍ]に弱まったと見られる．その後の発達については3.2.7を参照のこと.

3．古英語〈h〉の運命

3.1　母音が後続するOE〈h〉

ModEの語頭や形態素初頭で母音が後続する〈h〉は［h］と発音される.[20] ME末期においても〈h〉は語頭か形態素初頭にのみ現れ，OE時代にそれ以外の位置に綴られた〈h〉は〈gh〉に置き換えられた．すなわち，かつて一様に〈h〉と綴られた［h］と［x, ç］がMEにおいて別個の音素となり，それぞれ〈h〉,〈gh〉と綴られたと考えられる．これを敷衍すると，語頭や形態素初頭で母音が後続するOE〈h〉もOE末期には［x］から［h］に変化していたかのように思われる．

3.1.1　この素朴な推論の真否を確認することは難しい．しかし，OEの「〈h〉＋母音」にはじまる語に母音に終わる接頭辞が接合した場合を見れば，この位置におけるOE〈h〉の音声実現が見えてくる．例えばOE habban “to have”の諸形態に否定辞neが接合するとき，（6）のごとく〈h〉が消失する．

（6）　OE nabban < ne habban “not to have”
　　OE næfde < ne hæfde “(I, he) didn’t have”

このような現象が起きるのは〈h〉が声門摩擦音［h］ないし［ɦ］と発音される場合に限られる．［h］と［ɦ］は口腔内での呼気の流出を阻害しない子音であり，それを発する際の口腔の取る形状は，それに隣接，特に後続する母音のそれに酷似する．そのため，特にこの子音が母音に挟まれると，日本語のような拍（モラ[21]）を厳格に維持するような言語の場合を除いて，しばしば隣接母音に溶け込んでしまう．すなわち［ne'hɑbbɑn, ne'hævde］ないし［ne'ɦɑbbɑn, ne'ɦævde］は，無アクセントの初頭音節が弱化した*［nə'ɑbbɑn, nə'ævde］を経て［'nɑbbɑn, 'nævde］に達したと考えられる．

以上を踏まえ，OE ne habbanの諸異形態が形成される過程を（7）に明示する．以下で用いる諸変化の名称は一般的なものである．ただし，重音化geminationを引き起こしたのが，付加された接尾辞jであることが明らかなように，この変化をj-geminationと仮称した．Anglo-Frisian brightening（以下

ではbrightening）は英語とフリジア語に生じた［a］>［æ］の前舌・狭音化ないし明音化を指すが，ゲルマン祖語から古英語の前段階の間に想定される母音の変化全般，また子音の円唇性［ʷ］の喪失も仮にここに含めた．その後，語尾の［ɑ］の影響で語根の［æ］が［ɑ］に転じる現象は仮にa-Umlautとした．ここで採用する相対年代設定（relative chronology）は無論私案に属す．

（7）

PIE	*k	*ne-kap-′		
Gmc.	Grimm's Law	*［ne-xaɸ-′］		
	Verner's Law	*［ne-xaβ-］		
	j-gemination	↓	*［ne-xaβ-j-］>*［ne-xaββ-］>*［ne-xabb-］	
Pre-OE	brightening	*［ne-xæβ-］	*［ne-xæbb-］	
	a-Umlaut	↓	↓	*［ne-xɑbb-ɑn］
	breaking	↓	↓	↓
	i-Umlaut	↓	↓	↓
OE	［x］>［h］>∅〈∅〉	ne hæ［v］->næ［v］-〈næf-〉	ne hæbb->næbb-	ne habban>nabban
ME	∅〈∅〉	nǎv-, etc.	—	—
ModE	∅〈∅〉	—	—	—

7世紀末のエピナルグロッサリーにはLat. angilla（angill*us*（*sic*））“clay”のOE語釈としてthohae（=þōhæ）が記される（Sweet 1885: 36）．これはその後þōhe, þōへと形を変えるが，ここにも母音間のOE［x］>［h］の脱落が見える．

3.1.2　上によって，語頭で母音に先行するOE〈h〉はすでに［h］と発音されていたことが垣間見える．（8）にhabbanとheorteの生成過程を例示する．

3.1.3　Gmc. *［x］が形態素末にあって，ヴェルナーの法則を受ける場合とさもない場合が併存する場合について概観する．（9）の例では本来の語根母音eを保つ正常階梯と，母音部をoに置換したo階梯，母音を失ったゼロ階梯がよく保存されている．PIE *deuk- に由来するOE *tēoh-anは母音間の〈h〉を失い，融合を経てtēonとなる．他方，PIE *duk-′はゲルマン語においてヴェルナーの法則による［x］>［ɣ］の有声化を受け，ME以降ではこれを［w］とし

(8)

PIE	*k	*kap-′			*kerd-	
Gmc.	Grimm's Law	*[xaɸ-′]			*[xert-]	
	Verner's Law	*[xaβ-]			↓	
	j-gemination	↓	*[xaβ-j-]>*[xaββ-] >*[xabb-]		↓	
Pre-OE	brightening	*[xæβ-]	*[æbb-]		↓	
	a-Umlaut	↓	↓	*[xɑbb-ɑn]	↓	
	breaking	↓	↓	↓	*[xeo̯rt-]	↓
	i-Umlaut	↓	↓	↓	↓	↓
OE	[x] > [h] ⟨h⟩	hæ[v]- ⟨hæf-⟩	hæbb-	habban	heorte	Angl. herte
ME	[h] ⟨h⟩	hǎv-	—	—	—	herte
ModE	[h] ⟨h⟩	have	—	—	—	heart

(9)

PIE	*k	*deuk-		*douk-	*duk-
Germ.	Grimm's Law	*[téux-]		*[táux-]	*[tux-′]
	Verner's Law	↓		↓	*[tuɣ-]
	j-gemination	↓		↓	↓
Pre-OE	brightening, etc.	*[teːo̯x-]		*[tæːɑ̯x-]	*[toɣ-]
	a-Umlaut	↓		↓	↓
	breaking	↓		↓	↓
	i-Umlaut	↓	*[tiːœ̯x-iθ]	↓	↓
OE	*[x]> *[h] > ∅ ⟨∅⟩ [ç] ⟨h⟩ [x] ⟨h⟩	*tēo**h**-an >tēon	[tiː(ę)ɕθ] tī(e)**h**þ	[tæːɑ̯x] tēa**h**	[toɣen] togen
ME	∅ ⟨∅⟩ [ç] ⟨h⟩ (early) [x] ⟨gh, ȝ⟩	tę̄n	[tiːɕθ] ti**h**þ (tę̄th)	[tex] tegh, teȝ	towen
ModE	∅ ⟨∅⟩	tee	(tees)	—	—

た．既述のOE hōn “to hang” と過去分詞 ġehangen も類例である．

3.1.4　OE ⟨hw⟩ はGmc. *[x^w] <PIE *k^w, *kw に由来し，Gmc. *[x^w] は徐々に [h^w]=[w̥]=[ʍ] に弱まったと思われる．後者はしばしば簡略に [hw] と記されるが，現実に [hw] という2つの分節音が発されるとは考えにくい．今日の英国北部や米国南部において ⟨wh⟩ がしばしば表す音がそのように簡略に記され，またそれを音韻論的に /hw/ とみなすこともまた可能だが，その実際

の音声実現こそ正に［h^w］=［$\underset{\cdot}{w}$］=［ʍ］である（cf. **2.4, 3.2.7**）.[22)]

OEにおけるこれらの反映は語内の位置によって異なる．まず，語頭で母音が後続している場合には（10）のように〈hw〉が綴られる．これがゴート語〈hʊ〉と同様に1音素ならば，その音価は語頭で母音が後続する〈h〉が［x］>［h］の変化を経るのと並行して，［x^w］から［h^w］の段階に至っていたと考えるのが妥当である．

（10） PIE *kwei-d-o-s>Gmc. *［x^wi:ts］（cf. Goth.〈hʊeits〉［x^wi:ts］～［h^wi:ts］）
>OE hwīt “white”

PIE *k^wo-s>Gmc. *［x^was］（cf. Goth.〈hʊas〉［x^was］～［h^was］）
>OE hwǣ “who”[23)]

OE［ɑ:］はME［ɔ:］に，円唇音に後続すれば狭い［o:］となり，その前の［h^w］の円唇性は余剰となって失われた．そのためOE〈hwā〉［h^wɑ:］>ME〈who〉の子音部は円唇性を失い［ho:］>ModE［hu:］となる．OE〈h（w）ū〉［$h^{(w)}$u:］>ME〈hou〉［hu:］>ModE〈how〉［haʊ］等も同様である．

語中で母音に挟まれる場合，（11）のようにOEにおけるGmc. *［x^w］の反映はその円唇性を失ってOE〈h〉に合一して［h］となり，母音間で失われた：

（11）

PIE	*k^w	*sek^w-		*sok^w-	*sk^w-
Germ.	Grimm's Law	*［séx^w-］		*［sáx^w-］	*［sux$^{w\acute{}}$-］[24)]
	Verner's Law	↓		↓	*［suɣ^w-］
	j-gemination	↓		↓	↓
Pre-OE	brightening, etc.	*［sex-］		*［sæx-］	*［soɣ-］
	a-Umlaut	↓		↓	↓
	breaking	*［seo̯x-］		*［sæo̯x-］	↓
	i-Umlaut	↓	*［siœx-iθ］	↓	*［sœɣ-in-］
OE	*［x］> ┌ *［h］> ∅〈∅〉 │ ［ç］〈h〉 └ ［x］〈h〉	*seo**h**an >sēon	［si（e̯）**ç**θ］ si（e）**h**þ	［sæo̯**x**］ sea**h**	sewen segen
ME	∅〈∅〉 ［ç］〈h〉（early） ［x］〈（g）h, ȝ〉（early）	sē̞n	［si**ç**θ］ si**h**þ （sē̞th）	［sa（u̯）x］ sa（u）（**g**）**h**	（seien）
ModE	∅〈∅〉	see	（sees）	（saw）	（seen）

3.1.5　母音に先行するGmc. *[x]はOEにおいて[h]に弱化し，母音に挟まれる場合には消失することが確認されたが，その例外と思しき場合もある．

まず，OE nēahēa “near-by river”, nēahēaland “near-by island” のような複合語においては母音間の〈h〉が保たれる．語末の〈h〉として扱われると考えられるから，**3.2** に記す場合に準じて[x]ないし[ç]と発音されたはずである．

また(9)によればPIE *deuk->Gmc. *[teux-]>Pre-OE *[teːo̯x-]にPIE *-eti>Gmc. *-eþを加えた現在3人称単数形は，語幹形成母音*[e]>[i](後に消失)によって語根母音にiウムラウトないし前舌化・狭音化の作用を受けた．その結果，*['tiːœ̯xiθ]>OE tī(e)hþ['tiː(ę̯)çθ]となり，early ME tihþ[tiːçθ]に受け継がれた．これは母音間のGmc. *[x]>OE[h]>∅の反例に見える．

同様の推移は(11)に記したPIE *sekʷ->Gmc. *[sexʷ-]の形態にも見られる．*[xʷ]が円唇性を失ったPre-OE *[sex-]は割れて*[seo̯x-]，iウムラウトにより*['siœ̯çiθ]>OE si(e)hþ[si(ę̯)çθ]，さらにearly ME sihþ[siçθ]に残った．

これらからすれば，母音間のOE[x]>[h]の消失は，現在2・3人称単数における語幹形成母音[i](<PIE *[e])の脱落後に生じたように見え，そう解釈した場合，これらは母音間のOE[x]>[h]>∅という想定に特に抵触しない．

3.2　母音が後続しないOE〈h〉

3.2.1　母音が先行し，母音が後続しないOE〈h〉は[h]に弱化しない．この位置のOE〈h〉が[x]ないし[ç]の段階を保持したことは(12)に明らかである．

3.2.2　[ç]は14世紀から失われはじめた(e.g. Brunner 1973: 366)．(12)に例示したOE neaht/nihtは曲用に際し語幹形成母音を挟まない，いわゆる語根名詞(root noun)である．PIE *o>Gmc. *aとグリムの法則によりGmc. *[naxʷt-](>Goth. nahts[naxts])，そこに明音化と割れを経てOE neahtが得られる．他方では接尾辞 -i- を加えた曲用に改編され，iウムラウトによって新形OE ni(e)htも誕生する．後者を受け継いだME[niçt]から[ç]が脱落して先行母音が代

(12)

PIE	*k^{w}	*nok^{w}-t- “darkened”		*tr̥h$_2$-k^{w}e “crosswise”	
Germ.	Grimm's Law	*[nax^{w}t-]		*[θurx^{w}-]	
	Verner's Law	↓		↓	
	j-gemination	↓		↓	
Pre-OE	brightening, etc.	*[næxt-]		*[θurx-]	
	a-Umlaut	↓		↓	
	breaking	*[nea̯xt-]		↓	
	i-Umlaut	↓	*[nea̯xt-i-] > *[nie̯xt-]	↓	
	metathesis	↓	↓	↓	*[θrux-]
OE	[x, ç] ⟨h⟩	[nea̯xt] neaht	[ni(e̯)çt] ni(e)ht	[θurx] þurh	[θrux] þruh
ME	[x, ç] ⟨gh⟩ (>length, etc.)	[naxt] na(g)ht	[niçt] > [ni:t] night	[θurx] thurgh	[θrux] > [θru:] þrugh, thr(o)ugh
ModE	∅ ⟨gh⟩	—	[nai̯t] night	—	[θru:] through

償延長されて[ni:t]となり，大母音推移によって二重母音[aɪ]を持つModE nightに至る．knight(OE cniht(~cneoht)), bright(OE bryht(~beorht)), fright(OE fryht(~fyrht)), flight(OE flyht), light(OE līht(~lēoht)), plight(OE pliht), right (OE riht), sight(siht(~sihþ)), wight “life”(OE wiht), wright(OE wryhta(~wyrhta)), high(<SM [hi:] <ME [he:ç] <OE hēah)等々も同様である．[e]が先行する場合には[ç]の影響でしばしばわたり母音[i]が入る：e.g. eight<ME eighte [ei̯(ç)t(ə)] < [eçtə] <Angl. [æçtɑ]~OE eahta [æa̯xtɑ]．ただし，ME aghte, aughteのようにgh[x]を持つと見られる異形態も併存し，事情は複雑である．

3.2.3 [x]が失われたのはその後の15世紀からとされる(e.g. Brunner 1973: 366)．この音の穴を埋めるために2種類の対策が講じられた．

その一方は[x]に先行した母音の代償延長である．(12)に例示したthroughはメタテーゼとこの延長を経て得られる．shoe(OE scōh)は素直なME[o:]>ModE[u:]を示す．[x]の前にはわたり母音[u]がしばしば挿入され，融合して先行母音は狭音化を伴う場合が多い．plough(OE plōh (~plōg)), bough (bōh (~bōg)), trout (OE truht)はそんな例であり，OE[o:]にわたり母音[u]が加わってME⟨ou⟩[u:]となり，大母音推移後にModE[au]に至る．taught

（OE tæhte）もこれに似て，OE［æ］>ME［a］は後続［x］の影響で［u］を加えられ，［au］>［ɔ:］となった．ONF cachierからの借入語ME cacchenの過去・過去分詞形も類推によって同様の形caughtとなった．fought（OE Angl. fæht（~feaht））もtaughtに準じるが，綴りは変わった．他方，though（OE þāh（~þēah））やdough（OE dāh（~dāg））ではこの［u］が綴られるものの，発音上［u］の影響は受けずにOE［ɑ:］>ME［ɔ:］>ModE［ou］という通常の変化を見せる．他にもdaughter（OE dohtor）やbought（OE bohte），brought（OE brōhte），ought（OE āhte），sought（OE sōhte）等々，綴りや発音が混乱した例は多く，一筋縄では行かない．

3.2.4　さて，［x］の消失に際して採られた他方の対策は，似た子音を代わりに用いて急場をしのぐことであった．その代替には主に［f］が用いられた．今日の英国の低俗な発音では［θ, ð］が［f, v］で代用されるが，恐らくこれに類する現象であったろう．併せて先行母音の短縮化がしばしば認められる．

Wells（1990）とUpton & Kretzschmar（2017）に基づけば，［x］の［f］による置換を今日まで保持する普通名詞は地方語を含めても以下の14語とその派生語だけである：[25] chough［tʃʌf］“crow”, clough［klʌf］“cliff”, cough［kɒf］, draught［drɑ:ft］, duff［dʌf］=dough, enough［ɪˈnʌf］, haugh［hɔ:（f）, hɑ:x］“corner, nook”, laugh［lɑ:f］, rough［rʌf］, slough［slʌf］“shed skin of snake”, shough［ʃɒg, ʃɒk, ʃʌf］“shockdog”, sough［sau, sʌf］“murmuring sound”, tough［tʌf］, trough［trɒf］．draft（draught）, dwarf［dwɔ:f］（OE dweorh）のようにfを綴る場合もある．

［x］を［θ］で代替した有名な例が西ヨークシャーの市Keighley［ˈki:θli］（OE Cyhhan-lēah）[26]であり，他方言にもまま見られるという（Brunner 1973: 367）．

3.2.5　まったく母音を伴わないOE〈h〉も［h］に弱化することはない．［h］が母音の前後でのみ調音可能な子音である以上，OE beor*h*t, for*h*t, wyr*h*ta等，子音間の〈h〉を［h］と発音することは困難であり，もともとの［x］が維持されたと考えられる．今日に残ったbright, fright, wrightはメタテーゼ（と場合によってiウムラウト）を経ており，前項までの扱いに準じる．

OE feor*h*, bur*h*（burg）, dol*h*（dolg）, seol*h*, heal*h*, mear*h*, weal*h*, þur*h*のような子音に後続する語末の〈h〉も同様に［x］と発音されたはずだが，名詞語末の［x］は恐らくOE末期までにほとんど失われてしまった．その主因は恐らく形態論にある．例えばOE seolh［seǫlx］“seal”の単数属格sēoles［se:ǫles］が*seolhesに由来することは明らかであり，主格末尾の〈h〉が［x］として保たれる一方，流音と母音に挟まれた〈h〉は母音間のそれに準じて脱落したと考えられる．併存することとなった2つの語幹seolh-, sēol-のうち後者が生き残ったのも致し方ないだろう．seolhの異形態seol（恐らくsēol）はすでにOEにも見られ（Bosworth），ME sēl（e）>ModE sealにはもはやOE〈h〉の面影はない．þurhは失われてメタテーゼ形に由来するthroughが残った．boroughはOE burhではなく，そのメタテーゼ形と混交したburuhの発達形と見られる．

また，OE seolhの単数属格sēolesにおいて，〈h〉の脱落に伴い先行音節の母音に代償延長が生じているのは不可解である．代償延長が生じるとすれば〈h〉はもともとその第1音節に属すはずだが，［seǫlx-es］ならまだしも［seǫlh-es］という音節構成はいかにも不自然だからである．類例にfeorh（<*［ferx］）と属格fēores（<*［ferxes］）等も見出されるが，healh（<*［xælx］）の属格halas（<*［xælxɑs］）は延長を伴わず，事情の全体像は見えない．OE hēahの比較級hīera<*hīehra（~hīerra）や*eohrǣd>ēored, earm（h）rēadのような複合語も参考にすると，母音に準ずる鳴子音と母音に挟まれる場合に［x］>［h］>∅の弱化が散発的に進んだようにも見える．Brunner（1973: 345）等も併せて参照されたい．

3.2.6 ここで特に検討すべきなのが，冒頭にも触れた人名Hrōþgār等に見られる「鳴子音＋母音」に先行する語頭のOE〈h〉の問題である．

> 【OE［x］は】母音の前の初頭音では，恐らくすでに気息音/h/に変わっていた．これが，/w/, /n/, /l/および/r/の前（従ってhw, hn, hl, hrで表される群）でもどの程度そうであったかは，それ程確かではない．（Brunner 1973: 351f.）

上にも見られるように，従来この位置のOE〈h〉の発音については諸家の見解も一致を見ていない．中尾（1985: 414f.）による総括も参照されたい．

しかしながら，音声学的な理由からすれば，［w］以外の鳴子音の前でOE〈h〉は通時音韻論的に期待される［x］の状態にあったと考えねばならない．母音に準じる音である［w］の前におけるOE〈h〉については次項に記す．

例えばOE hlūd “loud”を例に取ると，母音延長の経緯は不詳ながら，これはWest Gmc. *［xlu:da-］<PIE *klū-tó-（√*kleu- “to hear”）にさかのぼり，またGk. κλέω “praise”, Lat. clueō “be called”, R слушать “listen”等々にもつながる由緒正しい語であり，語源的にも，また上記のように音声学的にも，少なくとも初期のOE hlūdの初頭が［x］であったことに疑問の余地はない．これがModE loudに至る過程においてはME lud（e）, loud（e）［lu:d（ə）］等の形を経るが，その副詞OE hlūde>ME lude, loudeの別形にはlhude, lhoudeも知られ（MED），例えば1225-1250頃の作とされるThe Cukoo Song[27]にもlhudeが現れる．

さて，このlhudeないしlhoudeの初頭はどんな音を表記したのだろうか．母音に直接接する音節頭部のOE［x］が［h］に弱まったことは**3.1**に確認したとおりだが，OE hlūdのように鳴子音を介して母音に接するOE［x］もその傾向に乗ったことは想像に難くない．しかしながら，例えば［ha］は厳密には［a̯a］であって，［h］はそれが隣接する母音と口腔内の調音を同じくする以上，［hl］のように母音に接していない［h］を発することは困難である．例えばチェコ語の〈h〉は母音が接する場合は［h］ないし［ɦ］と発音されるものの，母音が隣接しないhlavní “main”（cf. R. главный）の初頭は［x］と発音される．チェコ語と同じ道を進む可能性もあったろうが，英語の採った選択は［h］と［l］を同時に発することであった．得られるのは無声化した［l̥］ないし無声側面摩擦音［ɬ］である．イングランドの先住ケルト人たるブリトン人の言語に発するウェールズ語やコーンウォール語に無声化した鳴子音が組織的に存在し，また英語に大きな影響を与えた古ノルド語にもこれらの無声鳴子音があったと考えられるため，[28]これらに接触した英語の話者にもこれらの音は疎遠でなかったはずである．しかし無声化した鳴子音は英語の主流に取り入れ

られず，程なく通常の有声鳴子音に合流した．すなわちOE hlūde［'xluːde］はlhude, lhoude［'l̥uːdə］~［'ɬuːdə］を経てlate ME lude, loude［'luːdə］に達したと考えられる．これはSmirnickij（1965: 54f.）の見解とも軌を一にする．結局，字面だけを見て単なるhの脱落やhl>lhのメタテーゼを想定することは誤りである．

類例には下記がある：OE hlāf>loaf; OE hlāford>lord; OE hlǣfdiġe>lady[29]; OE hlæhhan>laugh; OE hlystan>listen; OE hlēapan>leap, etc.

並行するOE［xr］>early ME［r̥］>late ME［r］の例には以下を挙げることができる：OE hræfen>raven; OE hraðer>rather; OE hrīstle≫rattle（?）; OE hring>ring; OE hringan>ring; OE hrycg>ridge; OE hrēaw>raw; OE hrōf>roof, etc．OE Hrōþgār と現代の人名Rogerも似た関係にあるが，後者はフランク人がフランスに持ち込んだ人名に由来し，直接の血縁関係にはない．

鼻音の該当例は少なく，OE〈hm〉は語頭に文証されない．OE［xn］>early ME［n̥］>late ME［n］の痕跡が今日まで残るのも下記程度である：OE hnecca>neck; OE hnutu>nut; OE hnappian>nap; OE hnǣgan>neigh.

3.2.7　3.1.4に確認したように語頭で母音が後続するOE〈hw〉は［hʷ］=［w̥］=［ʍ］となってその後まで保存された．Smirnickij（1965: 54f.）やGimson（1980: 216）を含め諸家はOE〈hw〉をOE〈hl, hr, hn〉とともに扱うが，前項での検討からすれば，このような扱いは適当でない．この点をまず付言する．

PIE *kʷ, *kwに由来するGmc. *［xʷ］>early OE〈hw〉［xʷ］は語頭で母音が後続する場合，同じ位置のOE〈h〉［x］が［h］に弱まるのに呼応して［hʷ］=［w̥］=［ʍ］に弱まった．だとすれば，この変化はOE〈hl, hr, hn〉［xl, xr, xn］>early ME〈lh, rh, nh〉［l̥, r̥, n̥］の推移よりも早期と見られる．そして〈lh, rh, nh〉［l̥, r̥, n̥］は程なく〈l, r, n〉［l, r, n］に合流して失われたが，late OE〈hw〉とME〈wh〉が表示した［hʷ］=［w̥］=［ʍ］はその後も長らく保持され，英国南部の教養層において［w］に合流するのはようやく18世紀終わり頃である（Gimson 1980: 216）．

3.1.4で確認したように語中のGmc. *［xʷ］はOE〈h〉に合流して［x］と発音

された．母音に挟まれる場合は恐らく［h］を経て消失し，母音が後続しない場合は［x］の状態をMEまで保つ．（11）に記したPIE *sekʷ-を例に取れば，そのo階梯に由来する過去形（本来は完了形）であるOE sea*h*［sæɑ̯x］“（I, he）saw”の末尾は*［xʷ］（cf. Goth. saḫʊ［saxʷ］~［sahʷ］）から円唇性を失った［x］を示す．そして，［x］はME sa（u）gh［sa（u）x］まで生き永らえることになる．

４．結論

OE〈h〉は軟口蓋摩擦音［x］に由来し，早期においてはその本来の発音が維持されたと考えられるが，OE期の間に語頭や形態素初頭で母音が後続する場合に［h］に弱まり，母音間等で失われた．母音が後続しないOE〈h〉は本来の［x］，あるいは前舌母音が先行する場合には［ç］としてMEまで保存された．ME［x, ç］は失われて先行母音が代償延長し，またその前者の一部は［f］に置換されて今日に至る．鳴子音に先行する語頭のOE〈h〉は［x］を保ち，early MEにおいて隣接鳴子音と一体化して無声鳴子音と化すものの早期のうちに有声鳴子音に合流した．〈h〉との結合において〈w〉は他の鳴子音と一見似た振舞いを見せるが，両者の運命は似て非なるものであった．

［注］

1）　1883年まではBrugman，それ以降はBrugmannと綴った．
2）　日本中世英語英文学会第34回東支部研究発表会・第34回西支部例会（合同開催，2018年6月16日（土），於三重県勤労者福祉会館）．ハンドアウト・要旨 http://kamiyama6.wixsite.com/home；プログラム　http://www.jsmes.jp/blog/wp-content/uploads/2018/05/eastwest34_programme.pdf.
3）　IPAにおいて［ ̩］で表示される成節鳴子音は，印欧語比較言語学においてはSaussure（1879: 6）以来の慣用により -n̥- のように下に丸を付して表示される．印欧祖語の母音交替とソシュールの貢献については神山（2006; 2017）を参照されたい．
4）　OEでは女性名詞に改変されている．
5）　ドイツの学界のように印欧祖語に3種類の口蓋音を想定する場合，このkはk̂やḱと記されるが，私見ではフランスの学界が採る音声環境を加味した2種類

説が勝る．神山（2017: 98 注 64）を参照のこと．

6） Kloekhorst (2008: 469), Hoffner & Melchert (2008: 131), Lauffenburger (2008: 35), etc.

7） インド・イラン語に PIE *kerd- の素直な反映は見られず *kred- が現れる．この語根はいわゆる「2 音節語基」（disyllabic heavy base）であるとみなされよう．これをはじめて想定した Saussure（1879: 239ff.），また風間（1978: 218ff.）や神山（2017: 108）を参照のこと．また，Skr. ś ないし ç に対応する音素は略式に /ʃ/ と記した．

8） Skr. hṛ́d- /ˈfṛ̥d-/ “heart” や Av. zərəd- /zṛ̥d-/ は Indo-Iran. */ɟʰr̥d-/<PIE *gʰr̥d-（?）からの発達を予想させるが，他語派に現れる *kerd-/*kr̥d- との関係については不詳．

9） ъ と ь はそれぞれ後ろ寄りと前寄りの /ə/ として扱った．母音と流音の位置が入れ替わっている経緯については神山（2001）を参照されたい．

10）「硬口蓋の，硬口蓋音」の意味で palatal を用いたのはフランスの聖職者・文法家 Louis de Courcillon（別名 l’abbé de Dangeau, 1643-1723）が最初らしく，これを紹介した英語における初出は 1728 年である（OED）．

11） 挿入音が発生するメカニズムについては神山（1995: 212ff.）を参照．

12） 漢字のような機能を果たしたアッカド文字で記されるためヒッタイト語の 100 の形態は知られていないが，kēr/kard- “heart” からすれば，それは k にはじまったはずである．リュキア語（Lycian）の sñta については例えば大城・吉田（1990: 221f.）を参照．

13） 鼻音の扱いがスラブ語特有のものと異なるため，黒海北岸を占めた古代のスキュタイがもたらしたイラン語借入語である可能性が高い．

14） 語源不詳．

15） Karl Verner（1848-1896）がつきとめたとおり，ゲルマン語の無声摩擦音は先行音節が強勢を持つ場合に保存され，それ以外の場合には有声化した（Verner 1877: 114）．

16） いわゆる Anglo-Frisian brightening．3.1.1 参照．

17） 例えば高津（1954: 144）を参照．同所では tt に s が挿入され，一方の t が削除されるとする見解が採られているが，一方の t が s に異化したと見ることも可能である．

18） その由来について定説はないが，印欧祖語の分詞等を作る一般的な接尾辞 PIE *t>Gmc. *［θ］と同一視したい．ヴェルナーの法則による Gmc. *［ð］>West Gmc. *d が一般化したと考えられるからである．同法則を受けなかった Gmc. *［θ］> OE〈þ, ð〉は過去 1・3 人称単数形 OE cūðe “could” に残る．すなわち PIE *gneh$_3$->*gnō- “to know” のゼロ階梯 *gn̥h$_3$->Gmc. *kun-θ-（u は挿入母音）より摩擦音前

の鼻音の脱落と先行母音の代償延長によってOE cūðeが得られる．他説を含めてKiparsky（2009）等を参照．

19）さらにPIE *seh$_2$g->*sāg- “to trace”にさかのぼる．Cf. Lat. sāgiō “I perceive keenly”, Gk. ἡγέομαι “I go before,” etc.

20）無論，ch, ph, sh, thのように他の子音字に添えて用いる場合や外来語を除く．

21）Lat. mora［'mora］．長母音を含む「モーラ」と称する慣例は不可解である．

22）イングランド北部，スコットランド，アイルランド，米国南部では今日でも［hʷ］＝［ɣ］＝［ʍ］が優勢だが，大半の英語地域においては［w］が優勢となっている．Wells（1982: 228ff.）, Maguire（2012: 97ff.）, etc. 以下で今日の英語の発音を記載する場合は原則として英国RPのそれによる．北米GAでの発音を併記する場合には，英音に続く‖の後とする．

23）Prokosch（1939: 279）は古英語形が弱化と二次的延長を経ていると見る．

24）ゲルマン語は音節を形成するための挿入母音としてuを好む．

25）固有名詞には下記が見いだされる：Aughton［'ɔːt（ə）n, 'æft（ə）n］, Barhaugh［'bɑːhʌf］, Barraclough［'bærəklʌf］, Baughan［bɔːn, 'bɒf（ə）n］, Bough［bɒf, baʊ］, Brough［brʌf］, Broughton［'brɒt（ə）n, 'braʊt（ə）n, 'brʌft（ə）n］, Claughton［'klæft（ə）n, 'klaɪt（ə）n, 'klɔːt（ə）n］, Clough［klʌf］, Coleclough［'kəʊlklʌf, -klaʊ］, Coughlan［'kɒflən, 'kɒxlən, 'kɒklən, 'kɒglən, 'kəʊlən］, Fairclough［'feəklʌf, 'feəkləʊ］, Ferneyhough, Fernyhough, Fernihough［'fəːnihʌf, -həʊ］, Fernyhalgh［'fəːnihʌf, -hælʃ］, Goodenough［'gʊdɪnʌf］, Gough［gɒf］, Greenhough［'griːnɒf, -hɒf, -həʊ, -haʊ, -hʌf］, Heugh［hjuːf］, Hough［hʌf, hɒf, haʊ］, Houghall［'hɒf（ə）l］, Hougham［'hʌf（ə）m］, Lough［lʌf, ləʊ, lɒx, lɒk］, Loughboro’, Loughborough［'lʌfbərə］, McGough［mə'gɒf］, McLaughlin, McLoughlin［mə'klɒxlɪn ‖ -'klɑf-］, Newbrough［'njuːbrʌf］, O’Loughlin［-'lɒx- ‖ -'lɑf-］, Poughill［'pɒfɪl, 'pʌfɪl, 'paʊ-］, Maugham［mɔːm. 'mɒf（ə）m］, Waugh［wɔː, wɒf, wɑːf, wɒx］, Whatmough［'wɒtməʊ, -mʌf］.

26）Williamの指揮のもとに作成されたThe Domesday Book（1068）においてChichelaiと記述され，Kichalaie（1168-79）, Kyghelay（1305）, Kyghlay（c1450）等も勘案すると，人名CyhhaとOE lēah “piece of ground”（>ModE lea）から成り，「キュッハの地」）を原義とすると考えられる．Cf. http://www.keighleysharedchurch.org.uk/history.html.

27）別名Sumer is icumen in. Cf. http://www.bl.uk/learning/timeline/item126551.html.

28）例えば森田（1981: 21; 1989: 7f.）を参照のこと．

29）lordとladyの成り立ちについては神山（2015: 155f.）に触れたので参照されたい．

［略語］

<	comes from	Goth.	Gothic	OIr.	Old Irish
>	becomes	Hitt.	Hittite	ON	Old Norse
Angl.	Anglian	Lat.	Latin	ONF	Old North French
Arm.	Armenian	Lith.	Lithuanian	PIE	Proto-Indo-European
G	German	ME	Middle English	R	Russian
GA	the General American	ModE	Modern English	RP	the Received Pronunciation
		OCS	Old Church Slavic		
Gk.	Greek	OE	Old English	Skr.	Sanskrit
Gmc.	Germanic	OF	Old French	SM	South Midlands

［参考文献］

Benfey, Theodor 1837 Rezension: A. F. Pott, *Etymologische Forschungen auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen* (1833-36). *Ergänzungsblätter zur Halleschen allgemeinen Literatur-Zeitung*, December 1837.

Bosworth, Joseph & T. Northcote Toller 1921 *An Anglo-Saxon Dictionary*. Oxford: Clarendon Press.

Bradke, Peter von 1890 *Über Methode und Ergebnisse der arischen (indogermanischen) Altertumswissenschaft: Historisch-kritische Studien*. Giessen: J. Ricker.

Brugman, Karl 1879 Sprachkunde. Literaturgeschichte (Rezension): Saussure (1879). *Literarisches Centralblatt*. No. 24. 14. Juni.

Brunner, Karl; 松浪有，小野茂，忍足欣四郎，秦宏一訳　1973『英語発達史』大修館書店.

Gimson, Alfred Charles 1980[3] *Introduction to the Pronunciation of English*. London: Edward Arnold.

Grimm, Jacob 1822[2] *Deutsche Grammatik* I. Göttingen: Dieterichsche Buchhandlung.

Hoffner, Harry, Jr. & H. Craig Melchert 2008 *A Grammar of the Hittite Language. Part 1: Reference Grammar*. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns.

神山孝夫　1995『日欧比較音声学入門』鳳書房.

――2001「印欧祖語の成節流音をめぐって：スラブ語前史における『開音節法則』とメタテーゼ」『ロシア・東欧研究』5.

――2006『印欧祖語の母音組織：研究史要説と試論』大学教育出版.

――2014「ヨーロッパ諸語における様々な *r* 音について」『待兼山論叢』48.

――2015「OE *byrðen* “burden” vs. *fæder* “father”：英語史に散発的に見られる［d］と［ð］の交替について」『言葉のしんそう（深層・真相）：大庭幸男教授退職記念

論文集』英宝社.
――2016「名誉会員の業績に学ぶ：松本克己著『歴史言語学の方法：ギリシア語史とその周辺』,『ことばをめぐる諸問題：言語学・日本語論への招待』」『歴史言語学』5.
――（編），町田健，柳沢民雄　2017『ソシュールと歴史言語学』大学教育出版.
風間喜代三　1978『言語学の誕生』岩波新書.
Kiparsky, Paul 2009 The Germanic Weak Preterite. In Steinkrüger, Patrick O. and Manfred Krifka (ed.), *On Inflection*. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
Kloekhorst, Alwin 2008 *Etymological Dictionary of the Hittite Inherited Lexicon*. Leiden & Boston: Brill.
高津春繁　1954『印歐語比較文法』岩波全書.
Lauffenburger, Olivier 2008 Hittite Grammar. (http://www.assyrianlanguages.org/hittite/hittite_grammar.pdf)
Maguire, Warren 2012 Mapping *The Existing Phonology of English Dialects. Dialectologia et Geolinguistica* 20 (1).
森田貞雄　1981『アイスランド語文法』大学書林.
――，三川基好，小島謙一　1989『古英語文法』大学書林.
中尾俊夫　1985『音韻史』英語学大系第 11 巻．大修館書店.
大城光正，吉田和彦　1990『印欧アナトリア諸語概説』大学書林.
Prokosch, Eduard 1939 *A Comparative Germanic Grammar*. Linguistic Society of America.
Rask, Rasmus Kristian 1818 *Undersøgelse om det gamle Nordiske eller Islandske Sprogs Oprindelse*. København: Gyldental.
Saussure, Ferdinand de 1879 *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes*. Leipzig: Teubner.
清水誠　2012『ゲルマン語入門』三省堂.
Smirnickij, A. I. (Смирницкий, Александр Иванович) 1955 *Древнеанглийский язык*. Москва: Издательство Литературы на иностранных языках.
――1965 *История английского языка (средний и новый период): курс лекций*. Москва: Московский университет.
Sweet, Henry 1885 *The Oldest English Texts*. London: N. Trübner.
Upton, Clive & William A. Kretzschmar, Jr. 2017[2] *The Routledge Dictionary of Pronunciation for Current English*. London & Now York: Routledge.
Verner, Karl Adolf 1877 Eine ausnahme der ersten lautverschiebung. *Kuhns Zeitschrift* 23.
Wells, John Christopher 1982 *Accents of English*. 1-3. Cambridge University Press.
――1990 *Longman Pronunciation Dictionary*. Harlow: Longman.

（文学研究科教授）

Abstract

History of *H* in English

Takao KAMIYAMA

keywords : *h* in English, Proto-Indo-European, Proto-Germanic, Old English, Middle English

In this issue I was originally planning to review Brugman's half-hidden positive comment on Saussure's "*Mémoire,*" since it appears to be barely known to Indo-Europeanists and Saussureans. But I changed my mind in time to work on another topic, the present one, inspired by an insightful question I received from the floor when I read a paper on the history of *r*-sound at the Summer Forum of the Japan Society for Medieval English Studies, held in Mie, June 16, 2018. The point was how the Danish imaginary king name *Hrōþgār* was pronounced in *Bēowulf*.

Old English (hereafter OE) *h* comes directly from the Proto-Germanic (Gmc.) velar fricative *[x] which in turn stems from Proto-Indo-European (PIE) **k* affected by Grimm's Law. OE *h* is supposed to have retained its original phonetic realization on the threshold of its linguistic history, but it was being weakened in the course of its development. It yielded then the simple glottal fricative [h] when it preceded a vowel in the word- or morpheme-initial position. Further, it even disappeared, swallowed into the adjacent vowel, when it was also preceded by another vowel.

On the other hand, OE *h* retained its original dorsal articulation in [x] or, after a front vowel, [ç], when it was not immediately followed by a vowel: in fact, a proper [h]-sound is hardly pronounceable in this position. OE allophones [x, ç] survived through Middle English (ME), in the closing stage of which they finally vanished into thin air, leaving behind compensatory length of the preceding vowel with occasional substitution of [x] with a similar sound [f] (rarer [θ]).

However, OE *h* in the initial clusters *hr, hl, hn, hw* (with an accidental gap of **hm*) has gone through weakening, but they didn't follow a single track. OE *hw*, once pronounced as a single sound [x^w] (from Gmc. *[x^w] < PIE *k^w/*kw), soon reduced to [h^w] = [ʍ] in accordance with the [x] > [h] process above. As is known,

[ʍ] still survives in certain English-speaking areas though pronouncing simple [w] instead of it is now far more common. OE *hr, hl, hn,* on the other hand, once pronounced as two segments [xr, xl, xn], were simplified into devoiced resonants [r̥, l̥, n̥] only in very late OE or early ME, which in turn soon merged into ordinary voiced ones [r, l, n].

Hence, *Hrōþgār* is supposed to have been pronounced with an initial cluster [xr] unless the monumental epic *Bēowulf* was in fact composed in the very late OE stage.